

古きピアノ

人げなき奏樂堂のうちは、やう／＼ほのくらく、夕暮の色みち渡りぬ。今ひきやめつるソナタの波、いまだ耳にたゞよふ心地して、しばしたゝんともせぬわが傍に、たそや立てるかげあり。色あせたる青き衣の破れたるをまとひて、やせにやせし面わ、此世のものとも覺えぬに、白き髪亂れかゝれるが、しほみたる花束を手にしつゝ歩みよりて、いかに我を何とか見給ふ、我はもと外國に生れいでしを、遠く此國にうつされて、幾年か經にけん。思へば數多き我友のあるは大君のうたげのむしろにさぶらひ、あるは其名世にとゞろく一世の樂人の朝夕の友と爲り、あるは廣き世にかへりみるものだになきみなし子のなぐさめ人となれるなど、様々なる中に、われはこゝにありて、人々の心のまゝに嬉しきふしをもうきふしをも語らひ、あるは何の會くれの會などいふ折は、新しき天才を幾度か世にひきあはせけん。さる程に今はやう／＼おいくちて心ばかりは昔にかはらねど、語らはん声もうらがれはてゝは、したしみし人も疎くなりゆくこそはかなけれ。去年の春新らしきものゝこゝにすゑられしより、今はたかへり見る人だになく、會などの折々は片隅に隠されつゝ、いたづらに昔の春をこふるのみにて、過にし我心づくしはとふ人もなし。されどみづからだに淺ましと思ふほどにかくうらぶれはてゝは、新らしきにうつる人心をあながちに恨みもはず。さるを今猶むかし忘れずかたらひ人となし給ふ事の嬉しさに、かくはおどろかしまつるなりと、といきと共に語らふ様の何となく心にしみて、誰としも覺えぬ君かな、誰にかますらんといふ程に、さびしき笑をもらしつゝ、かたへのピアノの中にかげは消えぬ。

底本..佐々木信綱編「竹柏園集 第一編」

明治三十四(1901)年二月十日発行

入力..小林 徹

公開..令和四(2022)年四月十九日

橘糸重【[散文作品集](#)】に戻る。